

県中教研

特別支援教育部会だより

第 38 号

発行日 令和5年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 古川 順子
題 字 金山 泰仁 先生

一人一人の生徒に寄り添う校内支援体制

指導主事 小櫻 昌子

平成23年度から令和3年度までの約10年で、義務教育段階の児童生徒数は1割減少する一方、特別支援学級に在籍する児童生徒数は約2.1倍と倍増しています。また、通級による指導を受けている児童生徒数は約2.5倍となり、小・中学校、高等学校すべてで年々増加しています。障害種は多様であり、一人一人の障害の状態等に応じた指導・支援が求められます。

小・中学校の学習指導要領解説・総則編には、特別な配慮を必要とする児童生徒への指導について、「自立活動の内容を参考とし、具体的な目標や内容を定め、指導を行うものとする。その際、効果的な指導が行われるよう、各教科等と通級による指導との連携を図るなど、教師間の連携に努めるものとする。」と新たに示されました。

特別支援教育部会では、生徒の能力や可能性を伸ばし、自立と社会参加を目指して、支援体制の充実、教育課程の編成、指導課程と評価の工夫について、先生方一人一人が研究を進められていました。研究大会では、実態把握を十分に行い、指導目標を設定し、教育的ニーズに応じた指導・支援をしておられる授業を参観させていただきました。協議会でも、特別支援学級や通級指導教室を担当する先生方が、日々一人一人の生徒に寄り添い、生徒の自立と社会参加を目指した授業実践に取り組むことで、生徒の成長を実感しておられることが伝わってきました。

通常の学級において支援を必要としている生徒が増えています。通級での自立活動の効果が、通常の学級でも生かされる取組や工夫がますます求められます。今後も特別支援教育に携わる先生方が中心となり、校内支援体制の整備や校内研修の充実にご尽力いただけますようよろしくお願いいたします。

(東部教育事務所)

一人一人の未来に向けて

部長 古川 順子

今年度も継続し「特別な支援を必要とする生徒の個性や能力を伸ばし、自立と社会参加を推進するための指導はどうあればよいか。」という研究主題の下、「生徒の教育的ニーズに応じた学習過程の工夫」という副題を設定し研究を進めてきた。

私自身、特別支援学級で週に1時間、授業を行っているが、毎週悩んでいる。最初は「どうやったら、生徒たちが飽きずに授業に取り組めるか」を考えていたが、最近ようやく「生徒たちの今後の生活に役に立つような授業内容にするにはどうしたらよいか」と考え、取り組むようになった。理科の授業で、身の回りの物質を使って生活が豊かになるような実験に取り組んでいるが、本当にこの内容でいいのか、いつも自問自答している。

第66回研究大会の東部地区では、黒部市立清明中学校の知障級で生活単元の授業が公開された。4月から継続し、毎月、自分たちが思い思いに撮った写真を基に詩を作成した。彼らが気になるものの写真、短い詩の中にある彼らの素朴さ、純粋さに感動した。社会に出て生活に彩りを加えられるような授業であり、撮影と詩を作る継続的な学習過程の工夫も見られた授業であった。

西部地区では氷見市立南部中学校の知障級、自情級で道徳の授業が公開された。個々の生徒に合わせた教材を利用して、少しでも自分事として考え行動できるように心情円盤等を利用した授業が行われた。東部、西部ともに、オンラインや事前撮影したビデオでの授業公開となり、音声の聞き取りにくさが今後の課題である。

どの授業も生徒一人一人の個性を見極めながら、今後の生活に役立つように考えられており、生徒たちは達成感を感じていた。今年度は多くの教員が研究大会に参加でき、活発な話し合いが行われ、子供たちへの熱い思いを感じる大会となった。今後も一人一人の未来につながる支援や指導の充実を願っている。

(富・藤ノ木中)

第66回 富山県中学校教育課程研究大会

東部地区（黒部市立清明中学校） 令和4年10月18日（火）

研究授業は、知的障害特別支援学級（1年生男子1名、2年生男子1名、女子1名、3年生男子4名）で、寺崎真由美教諭による生活単元学習「季節の詩集を家族に贈ろう—写真に詩を書いて発表し合おう—」が行われた。授業は、事前に2台のカメラで全体の様子や生徒の様子を撮影し、当日、参加者が協議会場で視聴した。

授業内容は、子供たちが一年間かけてそれぞれの季節で撮った写真を、詩として表現し、お互いの作品を発表し合うものであった。



授業では、生徒が自分で撮った写真を見て詩を作るときに、メモの準備があることで、どの生徒もそれを頼りに詩の創作を行うことができた。また、ホワイトボードと短冊型のマグネットシートを準備して、それに詩を一行ずつ書き入れ語順の入れ替えをすることで、詩の構成を何度も考え直すことができ、より工夫することができた。発表の場面では、自分の詩の工夫した点を発表すると



ともに友達のよさを認め合うことができ、子供たち同士の温かい雰囲気を感じられる授業であった。

海見英理指導主事（東部教育事務所）から以下の助言をいただいた。

- ・授業では一年間をかけて写真を撮り、感じ取ったことを詩として表現することが、生徒たちにとって、癒やされる時間であり、豊かな心の育成にもつながっていた。生活面と結びついた実践的・体験的活動の工夫になっていた。
- ・「校外で写真を撮る・メモを作る・詩を作る」という3つの活動を1サイクルとして行うことで、子供たちも少しずつ慣れ、自信をもって主体的に取り組むことができていた。
- ・生活単元学習では、生徒の実態に合わせて活動の指導目標や指導内容を設定することが大切である。生徒の実態に合わせて実施されるとよい。部会協議①では、前半は、授業についての協議と日頃自分が取り組んでいる個に応じた学習過程の工夫についての協議を行い、生徒の興味・関心に合わせた活動や学習内容を継続することの重要性を学んだ。後半は、障害の担当別ではないグループに分かれて協議した。複式学級の先生方からは、個に応じた対応と同時に教科の授業を行うことは難しいという声が多く上がっていた。1時間の授業を前半・後半に分け、各自の能力にあった学習をしたり、共通する学習内容を決めて同時に学習したりするなど、それぞれの学習過程の工夫を話し合うことができた。

部会協議②では上越教育大学大学院 臨床・健康教育学系 教授 村中智彦先生より「中学校特別支援学級の授業づくりと就学支援」について、講演いただいた。

田中美津子（下・朝日中）

第66回 富山県中学校教育課程研究大会

西部地区(氷見市立南部中学校) 令和4年10月18日(火)

研究授業では、知的障害特別支援学級(1年生男子1名、2年生男子1名、3年生男子1名)で、村井和恵教諭による道徳科の研究授業、自閉症・情緒障害特別支援学級(1年生男子1名、2年生男子1名)で、清水昇教諭による道徳科の研究授業が行われた。授業は、各教室にカメラを設置し、参加者は別室で授業の様子を視聴した。

〈知的障害特別支援学級〉

主題 正直な心 A

教材 『『正直』五十円分』

(出典：廣済堂あかつき 小学4年生)

生徒の実態に応じて、市内小学校で使用されている下学年の教材が使用された。主人公と弟が、お小遣いで買い物をしたときのおつりが「少ない」「多い」という問題をめぐって、おつりを返そうと決めた兄弟の心の動きを共感的に理解することを通して、正直であることよさに気づき、明るい心で伸び伸びと生活する道徳的態度を養うことをねらいとした。

登場人物の心情を捉えるために心情円盤や場面絵を使用する工夫が取り入れられていた。



藤森範子指導主事(西部教育事務所)からは、以下の助言をいただいた。

- ・生徒の実態に応じたねらいや支援、評価の視点が指導案に示されていることにより、一人一人への指導方法が明確になっていた。
- ・教材の登場人物の立場に立ち、自分のこととして考えることができるよう、板書に吹き出しや色分け等の視覚的支援が工夫されていた。
- ・生徒が友達の考えに共感することができるよう、教師は、生徒の考えをつないだり、問い返

したりすることが大切である。

〈自閉症・情緒障害特別支援学級〉

主題 新しいものを生み出す A

教材 「『ミスター・ヌードル—安藤百福—』

(出典：廣済堂あかつき「自分を見つめる」)

インスタントラーメンを開発した安藤百福さんの姿から、探究や創造のよさや大切さに気付かせ、新しいものを生み出そうとする道徳的実践意欲を育てることをねらいとした。

実物のカップヌードルの提示や動画の視聴を取り入れ、生徒の興味を引きつけたり、年表を用いたりすることで視覚的に内容を捉えるための工夫が取り入れられていた。



小櫻昌子指導主事(東部教育事務所)からは、以下の助言をいただいた。

- ・実物の提示をしたことで、生徒の知りたいという思いの高まりが感じられた。
- ・一人一人の生徒がいかに成長したか、個人内評価をすることが大切である。
- ・自分のこととして考えることができていたか、振り返りの場面の充実が必要である。

岡本 奈々(氷・十三中)

中学校特別支援学級の授業づくりと就学支援

(第66回東部地区大会での講演趣旨)

上越教育大学大学院臨床・健康教育学系

発達支援教育実践研究コース(特別支援教育)教授 村中 智彦

1 本日の授業から

生活単元学習の授業として、指導案の段階から非常によく練られている。詩を作るだけであれば国語科の授業となるが、写真を撮る・詩を作る・詩集にまとめるなど、各教科を合わせた内容であり一連の流れがよくできていた。さらに生活に生かすために、生徒にとって身近な詞(lyrics)と結びつけるとよい。日常の中で感じたことを表現する喜びがあり、それを教科学習で高めることで自分の生活の向上に生かしている。

2 インクルーシブ教育とは

特別支援教育とは、特別な支援が必要な生徒に対して、一人一人に診断とは関係なく、できる限り支援することである。資源、人材には限りがあるが、支援学級や通級指導教室に行くことにより、子供と家族への丁寧で細かな支援体制がスタートできる。

インクルーシブ教育とは、障害のある子供だけでなく、身体的特徴や考え方や能力も、生きる経験も異なる様々な人間をそのまま受け入れ、多様性を認め、学びの機会を作ることである。移民や貧困、長期欠席のある子供、部落差別を受けている在日外国籍の子供等も含まれる。だが、多様性というのは、違いでもあり、それを認め合うことは難しいことである。違いを認め合うためには、関わること、対話することが大切である。また、自分の中にある多様性と向き合うことで、他者の多様性も理解し、認めていくことができる。

(その後、参加者同士のペアワークで「違い」を認めることの大切さや難しさ、どうすればできるかを話し合う。)

3 支援体制の現状について

幼保→小→中→高の支援体制の連携はよくできている。しかし、高校から専門学校・大学になると連携が難しくなり、成人期になるとかなり厳しい。特別支援学校在籍者数は横ばいだが、特別支援学級在籍者数は、小学校、中学校共に増加している。

発達障害の疑いがあるが診断は受けていない知的障害境界の子供の方が多い。障害が重い場合、親はその子自身の成長、将来の道があることを理解することで、療育サービスを早期に求め、生涯に渡って享受されることができる。発達障害等の障害が目に見えにくい子供の親は、いつか定型発達の子供に追いつけるのではないかと、療育サービスを求めなかったり、遅延されたりして、生涯に渡って支援が享受されにくい。早期発見、早期支援の意義は、一次症状の根治ではなく、社会不適応の軽減にある。親に対しては、子供の人生を第一に考えることを伝え、必要な支援を必要な時期に受けることで19歳、23歳になったときに、仕事に就き、自分の居場所を見付けられるようにすることが大切だと伝える。そして、就学先のメリット、デメリットは伝えるが、それを軽はずみに示唆しない。親の自己決定、判断が大切である。

日俣 千春(富・藤ノ木中)

